- 7) 森田 信：整形外科. 11: 902, 1960.
 8) 松野誠夫他：整形外科. 10: 497, 1959.
 9) 児玉俊夫：整形外科. 13: 784, 1962.
 10) 田中清一：久留米医誌. 19: 2046, 昭31.
 11) Wisbrum, W.: Z. Orthop. 84: 451.

1 卵性双生児に鏡像的に発現した先天性股関節脱臼

済生会福岡病院整形外科

児 玉 利 武

九州大学整形外科教室

八 尋 龍 二

Congenital Dislocation of the Hip appeared like Mirror-image in the Monoovular Twins

By

T. Kodama

Orthopedic Clinic, Saiseikai-Fukuoka Hospital

R. Yahiro

Orthopedic Department, Kyushu University

先天性股関節脱臼（以後 L. C. C. と略す）の遺伝的出現については、17 世紀の Ambroise Pre の記載に始まり以後家系的、遺伝学的に調査研究が行われ、その発現に関して種々の説が唱えられてきたが未だ確定をみていない。然しながら内因的遺伝という点から双生児及び異型第Ⅲ型の L. C. C. は、非常に重要視され数々の秀れた研究及び報告がなされているが、1 卵性双生児で鏡像的に発現を見た症例の報告は稀れであり、伊藤、田中、児玉らの数例を見るに過ぎない。

我々は最近済生会福岡病院において、1 卵性双生児の L. C. C. が鏡像的に発現した症例を経験し1 年間にわたり経過を観察し得たので報告する。

症 例

患者は生後4ヶ月の女子で、左足をいつも内側に寄せているという母親の訴えで来院、左 L. C. C. 診断した。(図2) 次いで双生児であることが判明し、妹をも診察したところ右 L. C. C. (図3)、であり、両者はX線像上鏡像的に発現している事が判明した。直ちにオムツカバーを装着治療を開始した。

経 過

初診時のX線像では、両者の脱臼は鏡像的であり、臼蓋形成不全の状態もまた鏡像的であつた。治療開始

図 1 氏 家 系 図

図 2 姉 生後 4 カ月

図 3 妹 生後 4 カ月

図 4 姉 整復後 4 カ月

図 5 妹 整復後 4 カ月

図 6 姉 整復後 1 年 3 カ月

図 7 妹 整復後 1 年 3 カ月

後 4 ヶ月 (生後 8 ヶ月) の X 線像上の変化でも臼蓋及び大腿骨々頭の状態も同様に鏡像的關係を保っていた。(図 4, 5) 更に 1 年 3 ヶ月後に於いても依然とし

て同様の關係を保ち続けていた。(図 6, 7)

更に鏡像的關係を確かめるため、鏡像位にして姉を実線で妹を点線で図示すると略々重り合うようである

図8 生後4カ月

図9 生後1年7カ月
(整備後1年3カ月)

(図8, 9) 又両者のX線像について Hilgereiver による臼蓋角の計測を行うと、臼蓋形成不全の状態は、治療開始前及び開始後4ヶ月、更に1年3ヶ月においても同様に鏡像の関係を保ち続けている。(表1)

遺伝的關係

L.C.C. 児 477 例に対する妊娠前の母体の異常、妊娠中及び出産時の母体胎児の異常及び遺伝的關係についての九大整形外科教室の調査(児玉報告)(表2)

表1 臼蓋傾斜度

生	後	右	左
4 カ月	姉妹	24.1 34.5	33.0 26.3
8 カ月	姉妹	23.0 28.9	27.9 24.2
1年7カ月	姉妹	21.5 27.0	26.0 22.5

表2 先天股脱児調査表

先天股脱 (例数 477)											
異常なし	遺伝的關係		出産時の異常	妊娠前の異常		妊娠中の異常					
	血族結婚	同先天性疾患の患	早産・死産・難産	流産・死産	性病	腹部打撲	アレルギ患	ビイルス患	ホルモ性疾患	放射線照射	薬剤投与
136	138	82	143	76	1	61	10	18	47	4	10

によれば、遺伝的關係あるものや死産、流産の母体前歴のあるもの更に出産時異常のあったものなどに極めて頻度が高いようである。

本症例では、家系図に示すように父方の姉に1組の双生児があるのみで先天性疾患は見られなく、また両親は血族結婚でもない。死産流産の母体前歴はなく、母親が10年前事故の為左大腿切断を行つたのみであり、分娩時義足使用の為帝王切開を行つている。(表3)

第3 調査

妊娠時母体の年齢	31 才
妊娠前の異常	10年前左大腿切断
妊娠中の異常	特記すべきことなし
出産時の異常	帝王切開
遺伝的關係	父の姉に双生児1組